
本番に至る前日の事 (お題:合同練習、南極、広告)

ray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本番に至る前日の事（お題：合同練習、南極、広告）

【Nコード】

N1145Y

【作者名】

ray

【あらすじ】

監督に促され鳥問高校野球部主将は、明日から始まる夏の甲子園地方大会に向けての意気込みを語る。

その言葉に明らかに失望する部員達。

主将には彼らの失望が意図するものが手に取るようにわかる。

言葉を介さずともわかる。

「問え」と。

これを問わずして、明日は訪れない。

疑惑、緊張、葛藤（前書き）

またしても三題噺でございます。

これまでのようにお題だけでは味気ないので今回はタイトルをつけてみました。

至らぬ所もございますが、否、至らぬ所しかございませんので、気軽にダメ出しや一言を頂ければ幸いですm（――）m
もしありませば良い点なども頂ければ、もう……

疑惑、緊張、葛藤

7月上旬、甲子園地方大会前日。夏本番を控えたこの時期の暑さなど鳥問高校野球部員たちには関係ない。今現在、彼ら及び関係者一同はバックネットの前に集合している。

大勢の部員たちと向かい合い、威風堂々と佇むは鳥問高校野球部監督。

選手時代は筋骨隆々の見本ともいえるような逞しい身体つきをしていたという話をよく聞くが、今の彼にその面影はない。シャツのボタンから悲鳴が聞こえてきそうなほどパンパンに張った腹に、面の皮を引きちぎらんばかりの頬肉。そのような体型が堂々とした姿と相まってか、今の彼はどうもふてぶてしく見える。

部員たちの視線を一身に浴び、そんな彼が口を開く。

「明日はついに甲子園地方大会だ。みんな、この一年間の成果を余すことなく見せつけてやってくれ。何も気負うことはない。ただそれだけ、それができればきっと大丈夫だ」

「「「「オス」「」」」」

返事はしつつも、鳥問高校野球部員全てが監督の言葉に大きな大きな疑問符を浮かべた。しかし、監督がそれを気に留めることはない。気づいていない。

「いつもよりだいぶ早いが、今日はもうこれで終わりだ。各自、明日に備えてしっかりと英気を養ってくれ」

「『『『オス』』』」

いつもならば練習の真つただ中の時間帯である。今この時この季節のグラウンドは、照明を使うか使わないかという程度には明るい。

野球部と違い大会がもう少し先の部活は練習を続けている。聞こえてくる声などからいつにも増して緊迫したピリピリとした雰囲気伝わってくる。どの部活動も追い込み段階にある。

如何に外面を取り繕うとも、こと鳥問高校野球部員たちの内面はこの時期の他の部員のような雰囲気を感じさせない。追い込み時期の過酷な練習を超えてきたという自身、来る日へ向けての緊張感、そういったものの悉くがない。

あるのは唯々、疑惑だけ。

監督は場を締める前に、一つ言った。

「キャプテン、一年間部をまとめてきた者として何か」

「オス！」

やっぱりそういうことになるよな。鳥問高校部野球部主将は緊張の最中に返事をした。

「何か」も何も、この一年の総括として言うべきことなどたった一つしかない。これが今この場にいる鳥問高校野球部主将も含めた監督を除く全員の共通見解である。ただ、彼がこの場でそれについて発言するかどうかとなると、曖昧である。

監督の決定に逆らって今現在この部にいる者は、誰一人としていない。誰もが疑問を抱いたにもかかわらず、従わざるを得なかったこと。

なので、選手もそうでない部員たちも誰もが野球部主将にただならぬ期待を注ぐ。

彼もその期待を感じ取ったのだろう。監督に疑念を抱くことなく、至極全うな練習を積んで今に臨むにしては、酷く緊張している。

監督のその一言で部員たちの間に粘度の高い空気が流れ込んできたようで、時間の経過が酷く緩慢になったような錯覚を受ける。

部員の群れの中から主将が出てくる。ゆつくりと、ゆつくりと。一步一步が重たい。この間も言うか言うまいかの逡巡は止まない。

皆その姿を息を飲んで見守る。中には小さな声で「頑張れ」だの「期待してるぞ」だのと思いきい言葉をかける者もいた。

体感的にはようやくのこと、野球部主将が監督の前に来てみんなと向き合う。

間。

沈黙。

鳥問高校野球部主将は未だに口を閉ざしたままだ。様々な思考のベクトルがせめぎ合い、総体として、無口。

無音の時間は監督の「どうした？」という一言が発せられるまで続いた。

疑惑、緊張、葛藤（後書き）

さて……、順調にストックが尽きてきましたよぉ…… or
z

逃避、自滅、圧力

「一年間……その、お疲れ」

「……オ「ッオ」「オス」ス」ス……」「」」」

鳥問高校野球部主将は酷く尻すぼみに言い放った。

監督の一言に反射的に口を突いて出た結果がこれである。部員たちも一呼吸遅れの不揃いな「オス」を返す。

不自然な間がほんの少しばかり空いた後に主将が続ける。

「練習だつたり試合だつたり、一年間皆で一緒に頑張ってきた。けど高校を卒業したら皆色々な道を進むだろう。それっきり二度と会うことがないヤツがいるかもしれない。それで皆は別々の所でまた新しい出会いがあつて新しい仲間ができると思う。そして、そういつらと一緒に一つの目標に向かっていくことになるだろうと思う。そんな時にはこの一年間を思い出してほしい。この一年間皆でやってきたことを思い出して行動すればきつとうまくいく。この一年間はいつか来るそんな時のためのすごく大きな糧に絶対なる。だからたとえ明日からの大会で負けたからと言って悲しむ必要なんてない。悔やむ必要なんてない。そんなのは、一切必要ない。この一年間の経験は死ぬまで生きていくということを信じ抜くことができれば、俺たちは絶対に大丈夫だ。」

主将の明日への抱負としては満点の挨拶に落胆する鳥問高校部員たち。中には半ば八つ当たり口に出さずと明確に憤りを表わす者さえいた。

確かに明日の大会には高校三年間の全てがかかっていて、その日に向けて気持ちを昂ぶらせるということは非常に重要なことである。

しかし、部員共々表現は様々違えど思っていることは、ただひとつ。

そうじゃねえだろ。

強いチームを目指して共に切磋琢磨しつつも監督の方針と正面から衝突し、去って行った部員たちのこと。なによりその原因となった要因について触れられていない。

他ならぬ主将自身が同じことを考えているのだ、鳥問高校野球部員たちのそういった思いは言葉として表現されずとも自然とわかる。わかりすぎている以上言葉で伝えられるよりも痛烈に伝わる。自分で言うておいて何だが『この一年間皆でやってきたことを思い出して行動すれば』一体何になるというのだろうか。

主将は自身の発言を顧みつつ次の言葉を続けようとする。彼のそんな些細な一挙手一投足にすら部員たちは息を飲む。

「所で監督……」

「うむ？ どうした？」

” ついにあのことについて触れてくれるのか ” と、期待の奔流は勢いを増す。 ” 来るか？ 来るか？ ” と感情が前のめりになる部員たち。

「……俺たちがこうやって一年間やってこれたのは父兄の皆さん、そして……、監督のおかげです」

完膚なきまでに墓穴を掘った。主将自身喋っているそばから目が泳いでいるという自覚があった。

主将の立場は更に悪化した。部員たちが憤慨するのは至極もつともな話である。よりによってそういうことを言うか。部員たちにもそれが形式ばったものだとは分かっているが、こと監督のみに限って言うと、それは余りにも現実との乖離が激しく、最早皮肉にすらなっていない。

「俺たちもお前らが見違えるほど立派に成長していく姿をみることでできてこの一年間は本当に充実して過ごすことができた」

どうやら監督は本気でそう思っているようだ。そして、言い終わると彼は続きを促すでもなく口を閉じたまま、ただただ主将が次に何を言うのかと感慨深げにしている。

彼のその満足そうな態度で部員たちとの温度差が更に広がってしまっただろうだ。

寒と暖の狭間に立たされ板挟みの主将。疑惑は募るばかりだがいざそれを口にするにはどうしても恐怖といって差し支えない感情が付きまとう。

練習内容。

これまで幾度となく監督が提示した練習の意義について尋ねたのだが、監督は一切それには答えない。それだけならばまだいいのだが、普段はふてぶてしくはあるが温厚な彼が、なぜかこの時だけはあからさまに機嫌を損ねるのだ。

今残っている部員は彼が放つオーラに圧倒され質問を諦めたか、もしくは初めから尋ねることができなかったかのどちらかにもれなく分類される。監督に屈することなく何としても理由を聞き出そうとした者もいたが、そういった面々は遅かれ早かれ皆部を去って行った。

——— 言えよ。

先程の主将の発言を受けて風向きが一気に変わった。野球部員ほぼ全員が同じ感情を芽生えさせた。そのベクトルは寸分の狂いもなく統一されていたため、その風当たりは非常に強くなる。

放棄、緩慢、進展

「あ」

強迫的とも言えるギスギスとした外圧に押さえつけられるかのように肺が収縮して、主将の意思と無関係に勝手に声が出る。もちろん吐き出された言葉に意味などない。

「ん？ 何だ？」

やはり上機嫌な監督。

少し間を置いた末に、主将は考えるのをやめた。

「もうどうにでもなれ」と、主将の心は覚悟も決めぬままに口に全てを喋らせた。

「この一年間ずっとやってきた練習の意味について教えてください。どうしてあれが野球の練習になるのですか？ どうしてそんな方法を取り入れたのですか？ 部員たちと衝突しながらもどうして頑なに変えなかったのですか？」

太陽が沈んでいく。グラウンドを風が通過して、軽い砂埃が舞う。

ついに言った。口は一気にまくしたてるように喋る。

ついさっきのことなどまるでなかったことのように、皆の意見をぶつけてくれた主将に、モーシヨンレスに賞賛の意を表す。主将は今、正に暴君に立ち向かう英雄の様である。

後はこれに暴君たる監督がどう応えるかだ。こうなることは既に分かっていたことだったが、それを上回る環境の到来。

監督にしてみれば完全に不意打ちだったのだろう。何やら感慨深そうだった表情を急激に一変させる。その変化の幅が大きすぎたためか、とんでもない過ちを犯してしまったのではないかという必要以上に後悔じみた雰囲気部員たちの間を駆け巡った。しかし、それでもやはり一切の説明なしにこの練習内容を受け入れるというのには納得しかねる。

問答無用に監督は怖い、だからと言って理由を聞かぬままでは多分明日は戦えない。濃度の一様でない不安が乱雑にせめぎ合い、得も言われぬ空間を醸成していた。

その空気に呼応したかどうかは定かではない。しかし監督はこれまでとは違い、問答無用で拒むというわけではなさそうで予想外にも「うーん」などという声を上げながら、普段見せないような深刻な表情で腕を組んで真剣に考え込んでいる。

感情が複雑に混線したままでその姿を見守る部員たち。これまでの経験から今回も無理なのではないか、しかし監督の反応がこれまでの経験とは違う。どういう結果になるのか、それはどうにも予測不可能で、彼が喋るまでは全く分からない。

先程とは類を異にする緩慢な時間が訪れる。

太陽は見えなくなり、地上付近だけが残り香のように朱く燃えている。既に訪れた青暗い闇とのコントラスト。名うてのバーテンダーの創造するカクテルのようなこの黄昏時の空は、日常に垣間見え

るささやかな奇跡ともいえる。

しかし、今の部員たちの心には、そういったものに気を配る程の
間隙がない。

次第に集中は研ぎ澄まされていき、グラウンドからの音さえも受
け付けなくなる。唯々監督の言葉を待つばかりである。

沈黙は暫く続いた。

そして、監督は口を開く。

「……そうだな、皆ここまで来たんだ。しかしそんなに一気にまく
したてられてもな」

そして一呼吸の後。

「さて、何から話したものか」

永遠のようにも長く、また、瞬きのようにも短い時間が過ぎた。

そしてこの瞬間、これまでとは別の類の沈黙が訪れた。監督の発
言は野球部の隣で一緒に話を聞いていた、合同練習相手の化学部員
にも静かな衝撃を与えた。

監督はついに一年間決して触れることのなかった練習内容の意義
について話し始めた。

放棄、緩慢、進展（後書き）

バカ展開の片鱗が少し見えたが、バカ加減も含め本作は真綿で首を絞められるかのごとくあと少し続きます。

再度、間隙、発覚（前書き）

今回はとても短いです。繋いでもよかったけどもあえて分けました。

再度、間隙、発覚

陽は完全に沈んだとはいえ、真っ暗というには空は未だ薄明るい。グラウンドに設置された巨大な照明がつい先ほど点灯されたところである。

これまで一切語られることのなかった、どう考えても無意味にしか思えない練習。その意味について遂に知ることができるということとで、鳥問高校野球部員たちは様々な面持ちで監督の言葉を待つという風である。化学部員たちはグラウンドに呼び出された時点で既に帰りたいという風である。

そんな中、改めて主将が問う。

「監督が俺たちに課した『化学部員と一緒に1/100000スケールの南極大陸のジオラマを作る』という一年間でたった一つの練習法。あれは一体何なんですか？」

その練習内容は、ありとあらゆる観点で捉えてもその悉くが優に逸脱している。故に「一体何なんですか？」と、極めて漠然とした形でしか疑問を投げかけられない。

この一年間、練習と言えば本当にたったこれだけである。グラウンドにも出ず、空き教室でただ黙々と作る。完成すればまた新しいジオラマを作る。一体どれだけの南極大陸が出来上がっただろうか、最早誰も正確に把握している者はいないし端から把握しようと思える者がいない。

「俺がこれまで皆に課した『化学部員と一緒に1 / 1000000スケールの南極大陸のジオラマを作る』というたった一つの練習方法だが、あれを取り入れることにしたきっかけはなあ……」

監督は冗長に言うと言葉を切る。そういった些細な間さえも部員たち、特に野球部員にとっては酷く長くものに感じられる。

「アダルトサイトだ」

再度、間隙、発覚（後書き）

次回、最終回。

アダルトサイトに秘められたその意味とは！？

酷い次回予告だなこりゃ…… or z

アダルトサイトと言いつつも18歳未満の方でも閲覧可能です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1145y/>

本番に至る前日の事（お題:合同練習、南極、広告）

2011年11月4日11時12分発行